

「布橋灌頂会」研究の方法 —関係史料にみる観念的・実態的—

加藤 基樹

はじめに

近年、わが国の山岳信仰史研究において、諸国霊山をフィールドとする研究は、歴史学的な文献研究が盛んになってきている。

立山の信仰史の場合は、近世以降の文献史料を活用したものが主である。殊に近世における立山（雄山を主峰として劔岳から浄土山までの山岳景観とその登拝路）に帯びた精神文化の諸相（本稿ではこれを〈立山信仰〉と称する）においても文献主義の傾向がみられ、諸国の山岳信仰と同様に立山の一山組織によって整備され制度化された歴史的側面がより明確になってきているといえよう⁽¹⁾。一方で、わが国の精神文化としての山岳信仰を明らかにしようとする宗教学的な研究等はあまりすすんでいない⁽²⁾。初期の〈立山信仰〉研究の分野では、庶民信仰としての山岳信仰については、民俗伝承や現象を記録し、そこに庶民信仰の論理の反映を読み取ろうとした。そして得られた仮説について、文献史料で裏づけを取る方法（仏教民俗学的考証）によって、〈立山信仰〉史が綴られてきた。ところがこれまでの仏教民俗学的解釈は、あくまで立山における旧宿坊家の経営的側面を含む伝承を伴いながら提供された文献に基づくものであり、主として旧宿坊家の近現代の解釈や利害のフィルターを通ったものであったといわざるをえず、しかも語られた伝承は「絶対的権威」であった。したがって、必ずしも十分な文献史料の精査を経た形で研究が成り立っていなかったのである。こうした研究史的問題点を受けて文献史料に基づく〈立山信仰〉史は、平成3年以降、立山博物館の資料整理業務を担当した学芸員の福江充氏が、史料的考察による多くの成果を挙げ、飛躍的に進むことになった。しかしながら、〈立山信仰〉の実態を示す膨大なデータは得られたが、そのデータによって、初期の〈立山信仰〉研究によって立てられた仮説⁽³⁾を批判し覆すことは困難であった。文献的な裏付けが取れない伝承そのものの史料的価値を認める立場にあっても、闇雲に伝承を重視しすぎるべきではないという問題意識があり、前近代の〈立山信仰〉研究においては、立山山麓集落のように、近代に組織的に大きく様変わりし、利害を伴う宗教的活動を展開するいくつかの旧宿坊家が共存する集落にあっては、まずは史料的な研究をおこない、そこから伝承を読みなおす方法をとるのが望ましく思われる。

さて、かつて立山は諸国霊山と同様に明治5年まで女人禁制の山であった。〈立山信仰〉において、女人救済の儀礼といわれる「布橋灌頂会」研究もまた、その対象である。それゆえに本稿では、「布橋灌頂会」の史料的実態を踏まえたうえで、当該分野の2、3の論点について考察し、当該研究の視点と方法についてまとめておくことを目的としている。以下、論を進める前に、今なお影響のある言説を示しておくことにしよう。

（布橋灌頂）法会の内容を、古伝によって総合すると、次のようであった。

諸国から参詣者は、まず閻魔堂（幽界）に入り、十王の審判を受ける。すべての罪を懺悔し、汚れをはらった女人は、白経帷子の死装束を着け、白布を捧げて娑堂谷に架かる天ノ浮橋を、盛装した長老役僧や、色衣をまとった衆僧に導びかれて娑堂（浄土界）に入る。その際、娑堂衆僧の出迎えもあった。

衆僧の勤行があり、やがて立山連峰が夕陽に輝くころ、東方正面の板唐戸が押し開かれ、遙か立山の雄姿を目のあたりに拝させ、以って、諸仏の止住する浄土に到達し得た思いにひたらせたという。

この時に受けた血脈を、納棺すれば、極楽往生ができると説き、また法会に使用された白布巻千三百六十端は、立山別山頂上の、硯ヶ池の白水で経が刷られ、立山経帷子として諸国の信仰者に配布され、その代価は衆徒の大きな財源となった。

立山の女人禁制とともに、女人を不浄視した当時の習俗に基づく女人救済・結縁のための仏事と解され、いかなる凶作の年でも、参千人の参詣者があったと述べるなど、その盛大さが伺われる。

—『立山町史』上巻（佐伯立光氏執筆部分より、昭和52年）

1. 「布橋灌頂会」概論 — 「布橋灌頂会」に関する史料の整理 —

「立山信仰史研究」分野において、立山は他界（あの世）であったとする「山中他界観」が先行した。その研究視点は今もその意義を失っていない。立山山麓芦峯寺集落にかつて存在した「媯堂」には、「山の神」と認識されていた媯尊が祀られ、その堂は立山そのものであった。

「布橋灌頂会」の参加者は、その媯堂に行き「血脈」を授かれれば、生きながらにして死んだことになり、そして再び此岸へ戻れば、心身は再生して生まれ清まり、新たに生まれかわると信じられた。「布橋灌頂会」を「擬死再生儀礼」と呼ぶのはこうした考え方に基づいている⁽⁴⁾。

さて、「布橋灌頂会」については、すでにいくつかの専論が備わる⁽⁵⁾。これらの成果によって、今日開催されている「布橋灌頂会イベント」として結実している点は学問の社会還元の好例といえよう。「布橋灌頂会イベント」は、平成8年（1996）9月29日に文化庁主催の「第11回国民文化祭とやま」として復元されたのを皮切りに⁽⁶⁾、現代的復元された「布橋灌頂会」は、平成17年、18年、その後不定期に数度開催された。布橋の位置する立山町芦峯寺集落では、かつて「布橋灌頂会」を執行した宿坊家は事実上すべて解体している。つまり「布橋灌頂会イベント」は、旧宿坊家として宗教的にイベントを執行するというあり方ではなく、芦峯寺の地域住民（代表は芦峯寺総代）が自治体などと連携して実行委員会を組織し、観光事業としての性格を色濃くしながらも、主体的にこれを継承せんとして、その間にも簡略化した橋渡り行事を開催し、イベントの成熟をはかってきた。平成23年の開催において「3年に一度」と取り決められ、平成25年に「ユネスコ未来遺産」に認定、そして平成26年には立山信仰の象徴的イベントとして「サントリー地域文化賞」を受賞しての開催となった。このように今日「布橋灌頂会イベント」は、社会的に高く評価されてきている。しかし、残念ながら、平成8年の現代的復元以降、学術的な成果による検証が加えられることはなく、その内容について議論されることは行われてきていない。「学問の社会還元の良い例」と指摘したが、その意味ではすでに観光事業化されたイベントにあっては、これに研究成果に基づいた改変を加えることは容易なことではなくなってしまっている、というのが現状である。なお、「布橋灌頂会」は、「布橋儀式」「布橋大灌頂」「布橋灌頂秘法」「布橋大灌頂法会」などの呼称の変遷が確認されるが、本稿ではこれらを総称して「布橋灌頂会」と表記する。

1-1. 「布橋灌頂会」に関する資料の種類

従来、「布橋」や「布橋灌頂会」に関する考察は歴史学と民俗学を併用して行われてきた。前者の立場による史資料⁽⁷⁾は、大きく次の五つに分類できる。

①立山芦峯寺一山会文書、②「立山曼荼羅」等の絵画・絵図資料、③縁起・勸進記、④道中記、そして⑤版木・金石文である。ここでは紙幅の都合で全貌を紹介できないが、研究方法の検証のための史料状況を踏まえる目的でまとめておきたい。

まず、①立山芦峯寺一山会文書は、当該分野において一級の史料群である。これらの多くは、すでに木倉豊信編『越中立山古文書』（昭和57年）などに翻刻があり、ひろく研究者の間で共有されてきた。たとえば「当山古法通諸事勤方旧記」⁽⁸⁾からは、文政期（1818～29）頃の「布橋灌頂会」の様子がうかがわれる。芦峯寺一山において古来の取り決め内容について整理・確認された文献で、衆徒の役目や心得などのほか、年中行事について、諸堂ごと、月日順に記録されている。また「諸堂勤方等年中行事」⁽⁹⁾は天保13年（1842）の「布

「布橋灌頂会」の様子を詳細にまとめている。これには芦峯寺にあった諸堂の縁日や節句のほか、それぞれの年中行事の作法や次第などが記録されている。「布橋灌頂会」は、「布橋大灌頂莊嚴式」と称され、毎年、年中行事として秋の彼岸中日に厳修されたことがわかる。これによると「布橋灌頂会」の開催日当日の準備と次第を詳細に知ることができる。

早朝：芦峯寺一山宿坊家をはじめ地域住民が嬭堂に参詣、芦峯中宮寺別当二老（院主）を導師として百万遍念仏の数珠繰りが行われ、説法がある。

[準備作業]

- ・衆徒と門前百姓らが、閻魔堂や布橋、嬭堂、それら周辺を清掃し、閻魔堂から嬭堂まで、白布360反を用いて3列の白道を引き流す。見物席との結界に竹垣を立てる。
- ・布橋は橋の欄干に6本の幡、68本の桜の造花、千挺のろうそくを立てる。
- ・閻魔堂と嬭堂の軒先に、前田家家紋入りの大提灯を掲げる。380個の燈籠型提灯と小灯をともす。
- ・嬭堂では、本尊3体に仏布施と丸餅などを供え、33体ずつ嬭尊が並ぶ須弥壇に、北側には小袖や帯、南側には白布一反を掛け供えた。
- ・出仕の衆徒や社人ら（式衆）は沐浴し、正午からの「布橋灌頂会」に備えた。

正午より：参加者は閻魔堂に入堂。引導師が「懺悔戒文」を称えるあいだ、各自、自分のところに向き合い、罪を懺悔する。つぎに「三昧耶戒文」を称え、仏性を目覚めさせる。大日如来の和讃、法華経読誦、真言などを称える。

閻魔堂出堂：引導師、式衆に導かれ、声明や楽器の音曲（幕末には雅楽も加わる⁽¹⁰⁾）に包まれて、白布の上を歩いて布橋へ向かう。

布橋渡り：灌頂行道「行き渡し講」。橋の中央で、引導師と対岸から迎えにきた来迎師が修法を行う。式衆百余名に見守られ、嬭谷川の音、音曲鳴り響くなか、2名の小僧に手引きされ、参加者らは布橋を渡りきる。

嬭堂入堂：式衆が、香が焚かれ莊嚴された嬭尊の前で四箇法要（4つの声明曲などで構成された天台系法要）を勤め、来迎師が「血脈」を授与し、説法を行う。

「布橋灌頂会」は近世中後期のあいだに変容しながら開催されたとみられるが、このように天保期にもっとも華やかな法要として大成したと指摘されている⁽¹¹⁾。

宝泉坊泰音が記した「御國命布橋大灌頂法会職衆請定」によれば、「布橋灌頂会」執行の際、芦峯寺一山の宿坊ごとに役割分担されていたことがわかる。これは安政5年(1858)の常願寺川流域は、飛越地震により土石流にて甚大な被害をうけたが、この年に執り行われた「布橋灌頂会」の役分担を宝泉坊泰音が揮毫したものである。翌安政6年の別当執行や出仕分担の一部変更箇所が添書きされている。こうした「職衆請定」は必ずしも毎年作成されたものではないらしい。このような「見せる分担表」が当年の「布橋灌頂会」で作成されたのは法会を誇示しなければならない何らかの意図があったのであろう。

立山芦峯寺一山會文書には、加賀藩への上申や嘆願した際の文書が充実し、法会執行主体側の記録として貴重である。しかし、加賀藩側の史料によってその内容証明ができないなど、その表現や残存する資料の意図等、解釈上、注意を要する。立山芦峯寺一山會文書は、一山組織の役割や経済的側面については詳細であるが、門前百姓など地域住民の関わりや立山を信仰する人々の様相やその宗教的な中身—縁起類は除く—について、実は詳細な記述が見当たらないからである。

次いで②の「立山曼荼羅」等の絵画・絵図資料は、ビジュアル的にかつての「布橋」境界の景観が示されるほか、「布橋灌頂会」の研究史的にみても中核的な資料とされてきた⁽¹²⁾。「立山曼荼羅」は、主として立山芦峯寺の衆徒が〈立山信仰〉の世界を唱導・布教する際、「絵解き」に用いられた宗教絵画である。絵図は失われた芦峯寺中宮寺伽藍のイメージ化の上で注目され、昭和45年に「布橋」が復元される際にも参考にされた。

「立山曼荼羅」に描かれた「布橋灌頂会」イメージのうち、日光坊A本（天保12年頃成立）は「立山曼荼羅」のなかでも、布橋灌頂会の場면을唱導・布教する目的で作成された絵画である。立山芦峯寺日光坊は、東海地方（特に尾張）に多数の檀那があり、農閑期になると立山を離れて遠く檀那のいる地域へ出かけ、立山の御札を配るなどして継続性のある師檀関係が結ばれていた。天保11年（1840）に行われた「布橋灌頂会」において、尾張国知多郡半田村（現 愛知県半田市）の信者たちが音楽（雅楽）を齎したことが知られる⁽¹³⁾。この時はことのほか賑々しく執り行われ、日光坊A本は、その際の法会の様子を反映し、知多におけるその後の唱導・布教に用いられたものと考えられ、「布橋灌頂会イベント」を現代的復元する際に最も重視された絵画資料である。実景観に近いこの絵を前に、各々心を問えば、その場がたちまち擬似的な「布橋灌頂会の場」となったのであろう。

「布橋灌頂会」に関する研究において、当該絵画史料の成立時期とそれに描かれた「布橋灌頂会」イメージを単純比較する論調も少なくない。「立山曼荼羅」に描かれた「布橋灌頂会」の図柄を写実的実景観であるとみる資料の扱い方が一自戒も込めて一横行しているが⁽¹⁴⁾、そもそも「立山曼荼羅」は観念的な絵画資料であることを前提としなければならない点、注意が必要である。その意味で描き込まれた説話画は、「布橋灌頂会」とこれに付帯した宗教的本質が何であったのかを究明する上では貴重である。

③縁起・勸進記は、「布橋灌頂会」に関する芦峯寺一山衆徒の唱導・布教内容とその変容、そしてこの法会への結縁者や勸進に応じた人びとの実態が知られる史料である。宿坊家と檀那場との関係が読み取れるので「檀那帳」とも呼ばれている⁽¹⁵⁾。縁起・勸進記の類も一山会文書に含まれるほか、雄山神社文書や善道坊文書、大仙坊文書や宝泉坊文書等⁽¹⁶⁾に分散して現存している。

初見は大仙坊発給の寛政7年（1795）「立山御嬭尊布橋施主帳」である。やや長い全文を示しておく（原文は漢文）。

そもそも御嬭三尊は、立山大権現御親神なり。嶺に九品浄土を現し、谷に一百三十六地獄の相を示したまう。しかればすなわち一尊はスピチニノミコト、一尊カシコネノミコト、また一尊はオオトマベノミコト、都合三尊はイザナギ以前の御神なり。

ことに御宝前に天之浮橋あり。この橋というは、渡するは善人のみ。しかるところ四海の男女成仏のため、彼岸中日において白布百三十六反を掛け渡し、貴賤を別けず救いたまう。しかのみならず、六十六体の尊像を現し、もつとも諸国霊場多しといえども、御嬭の靈験このところに現宿すと云々。

来る末年御嬭別当番に相当たり申すにつき、この番と申すは、日参いたし、御供、香花、灯明、時々祭礼多く、しかのみならず百三十六端の布橋掛けて、万民豊楽御祈念執事つかまつり、その上、衆生靈魂成仏のため法会執行いたしたく候ところ、仏前莊嚴造用など餘程御座候ゆえ、自力に叶いがたく、十方且信の諸助施御名をしるし、御宝前において現当二世諸願成就祈るものなり。

（中略）

寛政七卯年九月日 立山寺芦峯 大仙坊（角印朱印）

嬭堂別当の番が廻ってくるまで、およそ4ヵ年の間、その費用を勸進によってまかなったことがうかがわれるが、これ以降の勸進記を参照してもおおよそその期間は同様である。

次に、宝泉坊文書の「勸進記」、文化11年（1814）の勸進文言の事例を見てみよう⁽¹⁷⁾。

序

およそ日本第一の霊山、越中国新川郡立山は、開山慈興大上人、一切衆生済度方便のために、仏勅を蒙り、初めてこの梵窟を開き、絶頂に立山大権現鎮座まします峰に、九品の浄土を自生し、常に諸仏来臨したまい、善根功德の衆生を導き、谷に一百三十六の地獄を顕現し、五逆十悪の凡俗を徴諭したまう。ゆえにこれより諸人の禅定をゆるす。

そもそも麓に立ちたまう垂迹、御嬭三尊と申し奉るは、忝くも日本開闢の時、右に五穀の種を納め、左に麻の種を手持まします降臨したまい、国土にこれをあたえたまう。祭神はすなわち、天神七代、国

常立尊、イザナギ・イザナミの三神。本地、弥陀・釈迦・大日如来の三尊なり。和光同塵は結縁のはじめ、八相成道は利物の終わり、元これ一体分身にして、神と頭れ、仏と現じ、跡を御嬭尊にとどめたまう。これによって諸神諸仏菩薩ならびに国土の父母にして、末世の衆生、万物にもまた父母たり。この世界に生を請け、衣食住の備わりしも、みなこれ御嬭尊の御恵によれるものなり。しからば即ち、人たらん者は、まずこの御恩徳を報じ奉らずんばあるべからず。

よって人皇四十二代文武天皇の御宇、大宝年中、日本六十六ヶ国に評し、一国一尊にして御脇立六十六尊を安置したてまつる。この尊の御利益廣大無量にして、ながく凡舌をもって述べつくしがたし。ここにいささかその万億分の一を述べる。

一切衆生の日々夜々に造るところの悪業、少罪たりといえども、たとえば微塵積もりて山をなすが如く、ついには業因のがれがたく、無尽の苦悩を受ける事、嗚呼、痛ましいかな。仏も無縁衆生は度しがたしともうさじとなり。一度この尊に仏恩謝得のため、結縁の輩は、石のごとき罪惡たりとも、みな悉く消滅し、二世の諸願満足せしめんとの御誓願仰ぐべし、尊むべし。

かかるありがたき尊前において、毎年秋の八月彼岸中日に布橋観頂とて、御堂の前に川あり。これに渡せるを天の浮橋と号し、また向かいに閻魔堂あり。これより御堂までの間に三百六十六反の布をしきて、一山の衆徒、相集まり灌頂を修行し、この布すなわち御経帷子につくる。ここに当山の寺役として住持一代のうち、一度ずつ、坊中を順番に一ヶ年の間、御嬭尊の別当を相勤め、この灌頂の導師に相立ち、法会を修行す。この功德によってその身、色衣の僧位にのぼる。

しかるところに来る亥の年、愚僧、別当職にて法会の導師に相当たり候ところ、貧寺の事にて三百六十六反の白布、法会修行の雑用、ならびに年中の御供、燈明料など、自力に叶いがたく、これによってひとえに信施の他力を希いて、本願を成就つかまつりたく、あまねく十方の旦越を勧進す。もし善男善女この法会の助力、白布御供燈明料寄付なしたまうにおいては、その功德の善報、唯身に至らん。

現世にては、仏神三宝の擁護を蒙り、諸々の災難は朝日に霜の消えるがごとくに悉滅し、よく一切の願望むなしからず、鏡に影の写るがごとく成就円満し、幸福、雲のごとくに集まり、風のごとくに来たらん。その余徳、必ず子孫にまで幸いせん。来世は無始よりこのかた造る所の罪業を必滅して、すなわち身成仏し、三界法王の位にのぼらん。なお、その余光、六親眷属乃至法界平等利益、疑いなきものなりと、つつしんでこの勧進の意味を説くことしかり。

何卒、御信心の御方々、多少に限らずご寄付下され候よう、ひとえに希い奉り、しからばすなわち別当職首尾よく相勤め、右法会修行の砌はもちろん、当院あらん限りは、帳面に記しおき、永代御施主方、御武運長久、災難消滅、御家内安全、諸願満足の御祈念、朝暮、御嬭尊前において丹誠をぬきんで、修行申し上ぐべく候。以上。

文化第十一甲戌年三月摩訶吉祥日

越之中州立山宝泉坊

現住 照円 (白文朱印)

東都十方信施旦越衆中

これには数々の情報が詰まっているが、芦峯寺一山中で嬭堂別当職を務める者の勧進の目的が、やはり「布橋灌頂会」が中心であったことがよくわかる。順に廻ってくる嬭堂別当職を務める者(ここでは「亥年」と見え、翌文化12年開催)は、「布橋灌頂会」において導師を務め、色衣を纏う僧位に就くことも示されている。

近時旧大仙坊御霊屋で発見された小幅の「布橋灌頂会来迎師院主之図」(絹本著色、33.5×20.3、以下「院主図」と略称)を解釈するうえでも貴重なテキストである。「院主図」は本来立山の山岳景観や地獄絵、そして開山縁起をはじめとする説話画を描いた「立山曼荼羅」の一部とみられ、「布橋灌頂会」の図柄のうち、橋のたもとに影向石が確認されることから、嬭堂側の来迎師院主を中心とするごく一部分だけを切り取り表具したものであろう。顔料や描き方などは『立山曼荼羅』(大仙坊A本)に通じるところがあるものの、来迎師

が向かって左側に描かれるものは、成立が早いとされる『立山曼荼羅』(来迎寺本)などに見られ、現存する大仙坊A本などの系統と異なっている。「橋のたもと」だけを部分的に示す意味は未だ判然としないが、来迎師の部分だけを小幅に表具するのは、かつて大仙坊が「布橋灌頂会」の来迎師院主、あるいは媯堂別当を勤め、色衣を纏う僧位に就いた際の記念、もしくはその勸進に用いた可能性などを指摘しておきたい⁽¹⁸⁾。菊紋と桐紋を配した表具の劣化が激しいのに比べ、本紙の状態がよいことからすると、表具した後はほとんど開かれることがなかったとも考えられる。

さて、勸進記のなかでも幕末に近い元治元年(1864)、文久4年(1864)に至れば勸進文は次のとおりとなる(原文は漢文)。

布橋灌頂会とは、一切如来慈悲円満の悲報なり。このゆえにその法力、無疆に済むる。抜苦の音声は地獄に徹る。与樂の徳は浄土に通じ、群類化度無量にして、遭難に遭いがたき純密の法なり。

そもそも本源は瓔珞経灌頂経などに顕然なり。往昔、天竺祇園精舎において、釈迦如來說法の時にあたりて、慈悲女人俱那含女人等、数万端の白布をもって灌頂執行し、汝ら身は女人、内心は仏心なりとの宣説、ついに十方浄土を拝見し、都卒浄土に至る。またいわく、衆善の根本、よく衆生煩惱罪を滅し、無上菩提を獲得す。

ここに灌頂の規則は、閻魔堂より御媯灌頂堂に至る間、一千三百六十端の白布をもって三通を敷き、その上において、引導師・来迎師の脚灌頂は最深秘密なり。これゆえに、引導の阿遮梨は四百余箇日の間禁足して、一千三百六十度度の沐浴して、常に浄所に座し、また来迎師大阿遮梨は高德貴覚の苾芻を請し、また三通の白布は欲界・色界・無色界の三界衆生得脱の法なり。一千三百六十端の白布は百三十六地獄にして、その一の地獄において大苦患の数を十になし数え、その数、百三十六地獄の大苦、すべて一千三百六十度なり。このゆえに一反の布は獄中の大苦抜済の法なり。これによって、一反を施す善人は菩薩行として、また過去悪報に転じ現に善報を得る。よく生々世々の神仏酬恩の灌頂なり。

ここに一切衆生はじめて生まれる時、神仏加護を蒙るものなり。ゆえに十王経にいわく、汝、生まれ始める時、我、祖母となりて、三尺の衣那巾を授け、然れども、我ら衆生は、即生隔忘れ生まれ始めを知らず、本は無明煩惱種子の所為なり。

また迷途の路のほどを考えるに、十万八千里、そのうち川あり。三途川と号す。この岸に木あり。枇欏樹と名づく。この木の下に媯まします。両眼を輝かして悪人を呵責していわく、汝、生まれる時、骨肉は父母に借り、身の皮、我、汝に授くところの衣那巾、未だ衣食の大恩を知らずして仏法不信の罪を遁れがたし。今、着物剥ぎ取り、この木枝に掛け並べ、誠に三尺巾軽いといえど、業因重きをして、梢大地に付く。その罪業常破梨鏡に顕れて、たとえ高位果満の人なりといえども、苦患遁れず。迷いはすなわち沈む三途に悟れば、すなわち金蓮台に乗じて、五障三従八迷の女人、十悪五逆の人、ともにこの灌頂の道場に入れば、懺悔にわか罪障消滅、菩提を獲得せしむと云々。

この布橋大灌頂執行開闢は、人皇四十三代元明天皇和銅七年、立山開基慈興尊師、禁裏参内を遂げ、謹んで立山開峯の縁由、および灌頂の深義を奏聞す。かたじけなくも勅命を蒙り、誠に尊かな、永劫毎歳秋彼岸中日布橋大灌頂執行は勅賜なり。この時、布尺は二丈六尺と定め、御感悦のあまり五畿七道に命じたまう。続いて、元正天皇御代々、将軍家等御帛依浅からず。

御当代に至りて、加賀中納言殿先代芳春院・玉泉院、慶長十九年の秋八月、灌頂受けたまう。寛永元年、微妙院殿は深く御信仰ありて、法器等を御再営あり。法会、今に嚴重なり。伏して願わくば布橋大灌頂執行の法筵について、財宝を投げて、供養莊嚴の資料を備い、御膳・燈明・香花を献じたてまつり、すなわちこの功德によって、現世に息災長寿増運し、来世弥陀三尊御来迎・二十五菩薩とともに、大慈



「布橋灌頂会来迎師院主之図」

大悲弘誓莊嚴の船に乗りて、安養浄土往生すること疑いなきものなり。

右、前条に委しく御座候。御嬭堂別当は、およそ四百余ヶ日の間、禁足にて、一千三百六十余ヶ度の沐浴いたし、生涯一度の太行、もつとも、布橋灌頂法会の導師に相立功德によって、その身、色衣の僧位に昇る。しかるところ、来る寅年、愚僧別当職に相当たり、その財用おびたしく、ことに神事祭礼祈祷神供の饌品、年中御膳供・香華・燈明、わけて大灌頂は千僧大会につき、莫大の雑用など少なからず。拙僧、自力におよびがたし。これにより、十方且縁の信施の他力を乞い請け、本願成就したく、ここに一切衆生日々夜々に造所の悪業のがれがたし、苦を受けること鳴、いたましいかな。経にいわく、縁なき衆生は度しがたし。仏恩謝徳のために結縁の善男善女、この法会の白布等寄付なしたまうに、神仏三宝擁護を蒙り、諸々の災難は朝日に霜の消えるがごとく悉滅し、一切の願届むなしからず。鏡に影のうつるがごとく成就円満し、幸福、雲のごとくに集まり、風のごとくに来たらん。その余徳かならず子孫にまで幸せん。来世は無始以来造所の罪業を消滅して、すなわち仏果をえて法王の位に階らん。なお、余光六親眷属ないし法界平等利益なり。何卒、御信心の御心の多少に限らず、御施入、ひとえに願ひ上げたてまつり候。その財施の志にしたがい、永代御武運長久・家内安全・息災延命・諸願満足の御祈禱、および戒名・法名など別冊に志して、丹誠をぬきんで、祈念回向、怠慢なく修行を加え仕り候。以上。

元治元甲子歳

越中立山

宝泉坊現住（白文朱印）

泰音（花押）

このように、近世後期における立山芦峠寺衆徒の勸進唱導文の本旨にほとんど変化はないが、加賀藩先代との関わりが深いことや、嬭尊と奪衣婆を重ねて、白布の勸進をより強化している点は注目される。

このほかにも、部分的に現存する「立山芦峠御嬭尊前布橋大灌頂勸進記」（芦峠寺大仙坊文書）は、芦峠寺大仙坊が、檀那場において布橋灌頂会に必要な物品を勸進する際に読み上げられていたとみられる拝読文で、いかに「布橋」が、女性を救うことのできる橋であるのかを語った記録として注目され、布橋の功德の根拠や、女性が「都卒浄土」に往生することができる言説を展開している。日本の「三橋（日本三霊橋）」（行基：山崎橋、弘法大師：高野無為明橋、立山布橋）は、『俱舍論』の、帝釈天が掛け渡した三橋（中：黄金の橋、左：水精の橋、右：金銀瑠璃の橋）に擬えて語られていたことも興味深い。

天保2年（1831）の芦峠寺善道坊の勸進記である「立山御嬭尊布橋大灌頂勸進記」（芦峠寺善道坊文書）は、布橋灌頂会執行のために360反の白布の寄付を檀那場にて呼びかけ、「先祖代々」「一切精霊」等の、家としての先祖供養を目的として、檀那場において白布や金銭の寄進を受けている。勸進文は前掲の「立山芦峠御嬭尊前布橋大灌頂勸進記」に等しい。各宿坊家がそれぞれに縁起を語っていたのではなく、同時代には同一の勸進文句を使用していたことがうかがわれて興味深い。

このように縁起・勸進記に「布橋灌頂会」の具体相が読み取ることができる。歴史資料として「縁起」の取扱いは慎重でなければならないが、ここに「布橋灌頂会」の近世的本質が見出せると考えている。

④道中記は、近世立山登拝の際、その旅人の道中記録で、主として地名と里程を中心として、諸費用や天候のほか、名所・旧跡、習俗・慣習、そしてその見聞譚や感想などが記される。立山関係の道中記は複数存在し、そのなかに「布橋」もまた記される⁽¹⁹⁾。たとえば、寛政10年（1798）成立の佐藤季昌『立山紀行』、文化9年（1812）成立の野崎雅明『立山ノ記』、文政6年（1823）成立の尾張藩士『三つの山廻』、天保11年（1840）成立の大塚敬業『登山山記』、同じく関根氏『越中立山参詣記』などにみえている。

最後に⑤金石文は唯一一口、布橋擬宝珠が現存する。擬宝珠は布橋に六口備わり、その数は「南無阿弥陀仏」の六字名号によるとされた。現存するものには銘があり、

奉 寄進 橋同擬法珠

越中足倉 老婆堂

寛永元年

七月吉日

松平筑前守 為逆修 (原文のまま)

と刻まれ、寛永元年(1624)に加賀藩第3代藩主の前田利常が「逆修」のために橋の架け替えと擬宝珠を寄進・奉納したことがわかる。

以上のように、近世における「布橋灌頂会」に関する史料が現存し、これが当該研究の素材となっている。

1-2. 「布橋灌頂会」の基礎的理解

前近代における、人々の考え方や規則などは、現在と比べ大きく異なる時代であった。〈立山信仰〉における「近代化」の議論は他日に期したいが、立山で、明治時代以降、江戸時代に続いた宿坊家が神仏分離の影響によって俄かに「近代化」したと筆者は捉えていない。民衆思想は緩やかに変化しながら、やがて近代化していったので、宿坊経営のあり方—特に神職・祠掌らの—を前提に考察すべきではないと考えている。ともあれ、〈立山信仰〉は近世的世界観のなかでもっとも需要があったと思われる。

その意味で、近世民衆のあいだで、生前自ら積み上げた罪の内容や軽重によって、死後、地獄に堕ちるとの唱導があり、それを共有し信じられていた。墮地獄から逃れるために、罪滅ぼしを目的とする苦行の立山禪定登拝が男性の間で盛んになったとみられる。

立山禪定登拝において、[厳しい登山]は「苦行」に、そして[地獄谷めぐり]は「墮地獄」と考えられ、無事の下山は、苦行による滅罪、墮地獄からの脱地獄(生還)を意味し、死後の極楽往生が約束されると説かれた。

一方、女性は五障三従の身といわれ、死後、必ず地獄に堕ち、血の池地獄や石女地獄など女性専用の地獄まで存在し、極楽往生も叶い難しと説かれた。唱導によって滅罪の行場と謳われた「立山」は女人禁制であるとされ、女性の登山を許さなかった。かかる思想的世界において、女性に生まれた身の上を墮地獄から救うことはできないかとして、立山では殊に立山の登拝拠点の一つであった(芦峯寺)において、女人救済の文化が生成することとなった。ひとつは観念的に〈立山信仰〉を絵画化した「立山曼荼羅」、そして本稿が問題にする「布橋灌頂会」である。芦峯寺にはあの世とこの世と観念された境界(罫谷川)があり、そこに加賀藩によって架橋された壮麗な橋(天の浮橋・通称:布橋)が渡され、その仕様は「橋掛様之次第」⁽²⁰⁾によると、仏教数字に擬えて造られていた。橋の長さ25間(約45メートル)は、「二十五菩薩」に、橋の幅全体2間、内側9尺は「九品浄土」に、擬宝珠の数6つは、「南無阿弥陀仏」の六字名号に、敷板の数108枚は、「百八煩惱の数」や「数珠の珠数」に、そして用いる釘の本数69,384本は『法華経』の文字数⁽²¹⁾という仕様であった。史料によって多少の異同があり⁽²²⁾、御嬭尊前から布橋東詰まで25間、橋の長さは18間、布橋の4本杉は四方浄土をあらわしたものと考えられた時期もあったが、仕様については、加賀藩御普請橋でありながら、基本的に芦峯寺衆徒の思想的要求が受け入れられていたといえよう。そしてこの橋を舞台として「布橋灌頂会」という法会が執り行われるようになった。

近世〈立山信仰〉において、とりわけ女人救済の志向が強かったのは(芦峯寺)であったといえる。むしろ、立山地獄谷に現出したとされる「血の池地獄」と関係づけた女人救済の血盆経信仰は、(岩峯寺)衆徒らもまた、盛んに唱導を展開した話材であった。(芦峯寺)衆徒による「立山曼荼羅」を用いた絵解き唱導と「布橋灌頂会」の開催は、近世的な〈立山信仰〉の特徴の一つとして注目されるので、逆に山の女人禁制、そして女性の墮地獄譚をいたずらに助長したかのようである。ただ、近世立山に帯びた女人禁制の習俗自体は、他の諸国霊山のあり方と基本的に連動・共通している空間認識であり、女人禁制思想を強化したわけではない。宝永年間にはついに芦峯寺と岩峯寺の山支配をめぐる争論が表出し、加賀藩裁許によって、事実上、(芦峯寺)がこれ以降、立山での山銭徴収権や山の管理権など諸権利を失うことになり、山麓や他国での唱導活

動を余儀なくされたので、(芦峯寺)衆徒は、立山山中での活動よりも女人救済を基軸とする女人救済を強化していくことになったと考えられる。

1-3. 「布橋灌頂会」の成立

そもそも「布橋灌頂会」の文献上の初見は、芦峯寺一山会文書の「一山旧記控」である。

慶長19年(1614)8月に、芳春院「松」(前田利家(加賀藩初代藩主)夫人)と玉泉院「永」(前田利長(加賀藩2代藩主)夫人)が芦峯寺集落を訪れた際、嬭谷川に架かる嬭堂前橋に白布を敷いて「布橋」をあらわし、「大分之儀式」を行ったと見えている。これは後に書き写されたもので、同時期の記録は見つかっていない。「大分之儀式」なる表現を用いていることから、近世前期においては布橋を用いた儀式(布橋灌頂会)が芦峯寺一山で年中行事化していなかったことをうかがわせる。ただし、これを史実と読むならば、立山芦峯寺においては、「大分之儀式」に先行する素朴で規模の小さな浄土入りの習俗がすでにあり、これを華やかにより儀礼化したものとも解釈できる。そもそも橋は神を迎えたり送ったりする祀りの場と考えられ、靈魂も橋を渡って移動すると観念されたという考え方に立てば、「布橋灌頂会」の原型は中世に始まったと解されるからである。

仏教民俗学の立場からは、擬死再生、逆修供養、罪を洗い流す「流れ灌頂」の場となり、橋を渡ると罪をみそぎ、神聖化されると考えられ、素朴で規模の小さな浄土入りの習俗が醸成され、「大分之儀式」を経て、やがて近世後期には高野山学侶であった「龍淵」によって、真言系の仏教教義に基づく灌頂儀礼が整備され法会となったのであろう⁽²³⁾。

その意味で天保期にその完成をみる「布橋灌頂会」は、①閻魔信仰、②嬭尊信仰、③橋の信仰、④流れ灌頂儀礼、⑤密教灌頂儀礼、⑥導師・来迎師が此岸から彼岸へ歩いて渡し再びもどる儀礼、⑦浄土教の二河白道思想、⑧煩惱即菩提の思想など、多様な仏教文化が凝集した法会といえよう。これらは同時に組み合わせられて成立したのではなく、順に要素が加わりながら成熟していったものであることはすでに史料的に整理されているのでこれを参照されたい⁽²⁴⁾。嬭堂とその前の布橋が主たる舞台であるが、閻魔堂と嬭堂が結ばれる法会となったことも、史料的には延享年間以降に確認できるようになる。「布橋灌頂会」の起源を中世に見たとしても、芦峯寺において閻魔堂の成立は鎌倉時代に遡り⁽²⁵⁾、現存する史料的には南北朝時代成立の嬭堂⁽²⁶⁾より成立が早く、順序としては、両堂での法会よりも他界に見立てた嬭堂への浄土入りが先行し、それに諸種の仏教教義が付帯し、成熟を遂げたのであろう。

仏教の宗派的教義の取り込みの過程において、当時の庶民や庶民信仰を共有したとみられる芦峯寺衆徒らもまた「灌頂」を自由自在に解釈し、罪ほろぼしと精進潔斎による「うまれかわり」「生まれ清まり」に通じるのだという考え方は変わらず根底にあったと考えられる⁽²⁷⁾。このように生きながらにして、仏教でいう死後の仏菩薩の来迎や極楽浄土へおもむく様子をデモンストレーションして、人々に目の当たりにして見せる儀式は、各地に残っている⁽²⁸⁾。

1-4. 白布調達量の変遷

「布橋灌頂会」の「布橋」は、浄土入りの際の白道をつくったことで通称となり、「二河白道の思想」に基づくものであることなどはよく知られている。

「二河白道の思想」は、浄土教で重視された『観無量寿経疏散善義』に、貪愛の水の川と瞋憎の火の川を食りと怒りにたとえ、その二河にはさまれた、ひとすじの白い道(清浄な願往生心)を、彼岸に至る往生の信心にたとえたものと説かれている。煩惱にまみれた凡夫も、釈迦の勧めと阿弥陀の招きを信じて、念仏ひとすじにつとめるとき、悟りの彼岸に至るとする考え方が示され、これを法然が『選択本願念仏集』に引用し、説法に用いたため、浄土宗を中心にひろく知られるようになった。鎌倉時代以降、浄土教絵画として、二河白道の考え方を図説化した絵画が作られるようになり、富山県内にも数点現存している。絵画には、群賊悪

獣に追われた絶体絶命の旅人が釈迦の発遣と弥陀の招喚とによって、娑婆火宅の東岸から極楽の西岸に白道をわたっていく様子が描かれている。

北陸は「真宗地帯」と称され浄土真宗寺院が多数存在する。真宗大谷派の城端別院善徳寺に「二河白道図」・「二河白道之図」（富山県指定文化財）が現存している。「二河白道の思想」は、浄土教系の宗派寺院（浄土宗・浄土真宗など）では、極楽往生を願う信心の比喻を絵画にあらわし、江戸時代以降、檀家や門徒に対して説教に用いられた。「布橋灌頂会」は、この信心の比喻を法会に取り入れたものと思われる。

さて、「布橋灌頂会」に用いられる白布の量は、史料的には3段階に増していく。当初、136反（1反の長さは約10メートル）調達され、136反は地獄谷にあるとされた136の地獄の数に擬えて勸進を行った。やがて調達量は360反となり、およそ3倍の数量を調達し、幕末においてはさらに1,360反となった。

かかる変遷は、檀那場における経帷子の頒布と関係している⁽²⁹⁾。経帷子は、布橋灌頂会で使用された白布を使用されたものをリフォームして制作された。宝泉坊の事例では、江戸の檀那場で毎年80枚前後の経帷子を頒布し、約30両を得ていたという。

閻魔堂から娼堂まで、初期には一筋の白布を敷き渡していたのが、やがて「三百六十六反の布をしきて」3筋の白道を造った。本尊としての娼尊が3体であることを重視してのことであろう。そして「一山の衆徒、相集まり灌頂を修行し、この布すなわち御経帷子につくる」とあり、この際、「一千三百六十端の白布は百三十六地獄にして、その一の地獄において大苦患の数を十になし数え、その数、百三十六地獄の大苦、すべて一千三百六十度なり。このゆえに一反の布は獄中の大苦抜済の法なり。これによって、一反を施す善人は菩薩行として、また過去悪報に転じ現に善報を得る。よく生々世々の神仏酬恩の灌頂なり」との方便が用いられた。

延享4年（1747）	136反	「布橋灌頂会次第につき書付」（芦峯寺衆徒中）
安永8年（1779）	136反	「芦峯娼堂大縁起」（日光坊）
寛政7年（1795）	136反	「立山御娼尊布橋施主帳」（大仙坊）
文化2年（1805）	360反	「立山御娼尊莊嚴施主帳」（善道坊）
文化14年（1817）	136反	「芦峯中宮寺娼堂大縁起」（権教坊）
文政3年（1820）	136反	「御娼尊縁起」（宝伝坊）
文政3年（1820）	360反	「立山御娼尊別当奉加帳」（泉蔵坊）
文政6年（1823）	360反	「立山御娼尊別当奉加帳」（大仙坊）
文政10年（1827）	360反	「北国立山御娼堂別当奉加帳」（相善坊）
天保2年（1831）	360反	「立山御娼尊布橋大灌頂勸進記」（善道坊）
天保13年（1842）	360反	「諸堂勤方等年中行事」（芦峯寺一山会）
天保13年（1842）	1,360反	「立山御娼尊別当奉加帳」（大仙坊）
文久4年（1864）	1,360反	「布橋灌頂会執行奉加帳」（宝泉坊）

上記のうち、宝伝坊元良「御娼尊縁起」は、芦峯寺の娼尊の由来や靈験を示した縁起で、娼尊は立山大権現の親神で、人が母の胎内に宿るとき、娼尊はその祖母となり、子どもに3尺の胞衣（胎衣 [えな]）を貸し与え、この世に誕生すれば7枚にして返す契約であるが、一尺も返さないと、その子が寿命を全うしたとき、娼尊は三途の川の奪衣婆となり、貸した胞衣を返せと迫るといふ。「布橋灌頂会」では白布が多く寄進されたが、単なる法会の資材調達ではなかったため、娼尊信仰の言説自体も「奪衣婆=娼尊」に力点が置かれて変容を遂げていった。

天保13年（1842）「立山御娼尊別当奉加帳」（芦峯寺大仙坊文書）は、1,360反の白布の寄付を呼びかけたことを示す史料の一つで、大仙坊由道が同坊の檀那場で寄付を募った際、木版刷りで作成され、村ごとに作成された奉加帳の一部である。白布一反を寄付した人には、立山で供養した「血脈」と「血盆経」などを授ける、と記されており、東海地方をはじめ、遠隔地に居ながらにして、「布橋灌頂会」で授与される「血脈」

など御札を受けるとことができ、法会に参加したことになったのである。

ちなみに芦峯寺で使用された木綿は、知多木綿（愛知）、新川木綿（富山）などが使われたと考えられている。当時木綿は産地から一度すべて江戸送りになり、それから全国各地へ小売りされていた。1,360反（約13km）に及ぶ分量の木綿が立山芦峯寺へどのように運搬されたのか、その史料は確認されていない。

1-5. 加賀藩御普請の布橋

すでに触れたように立山芦峯寺の「布橋」は加賀藩の御普請橋であった。

天保14年（1843）秋に架け替えが完了した「布橋」の「橋札」が芦峯寺に伝わっている。近世における木造の「布橋」は、洪水で破損したり、腐朽したりするたびに、何度も架け替えなければならなかった。明治時代になると普請事業はストップし、その後消滅した。現存する「橋札」⁽³⁰⁾は最後の布橋工事の時のものである。

これによると、「布橋」は慶長11年（1606）に初めて架橋され、その後寛政年間（1789～1800）に石垣がごとごとく崩れ大破、30年あまり仮橋であったが、文政3（1820）年、再び旧形に復元された。それから20年あまり経ち腐朽して、天保14年の架け替えとなったことがわかる。

こうした経緯は他の文献史料からも裏付けられ、近世を通じて橋として常に優れた状態を維持できていたわけではなかった。「嬭堂前布橋東方の石垣破損口上控」⁽³¹⁾によると、布橋を支える嬭谷川東詰めの石垣が、洪水で崩れてしまい大破したことを寺社奉行に報告している。石垣を支える柱2本も転倒するなどし、布橋（仮橋）が落ち下がっている様子を寺社奉行へ即日報告している。「橋一件覚書」⁽³²⁾にみられるように、寛政年間のはじめ頃（1789～92）に「布橋」は大破し、以降、仮橋の状態が続いていた。仮橋は弱く、頻繁に修繕が必要であったようで、文化14年（1817）の「書附写 巻」（芦峯寺雄山神社文書）においても、仮橋の状態が続いているが、豪雪の芦峯寺集落で、脆弱な仮橋ではいよいよ不自由であり、毎朝の嬭堂の供物や祈禱、通行往来は谷に降りて登るといふありさまを吐露している。また石垣が中途半端に残っているのではしばしばそれが崩れてとても危険で、芦峯寺一山の者、自他国からの参詣者の命に関わることだと述べて橋の架け替えを嘆願している。この期間は、修復・架替の嘆願が目立つが、この期間にも「布橋灌頂会」は継続して毎年行われていたと考えられるが詳細はわかっていない。

「御嬭堂宝前布橋御掛替願書」⁽³³⁾から天保14年の布橋架け替えまでの軌跡が知られるが、天保14年（1843）加賀藩仕えの大工によって架け替えられた橋は、施工ミスで25間ではなく24間になってしまった。仏教数字にひきつけた仕様にこだわる芦峯寺一山衆徒の姿勢がうかがわれて興味深い、それよりも、資材は立山美女平付近から切り出されたという点はさらに興味深い。

「断簡（段ヶ原材木のこと）」（芦峯寺雄山神社文書）に、芦峯寺の布橋をはじめ諸堂の材木は、美女平（標高1,000メートル付近）の段ヶ原の材木に限り使用することを強調している。ちなみに立山雄山山頂の峰本社の建替・修復に用いる材も段ヶ原で伐採したものを使用することはすでによく知られている。段ヶ原の材を用いる理由は、美女杉の種生茂る杉木であるからだという。さらに、もし他所から購入した他の材木を用いれば祟りが多いので使用できないとの禁忌も述べている。「美女杉」には、かつて「女人禁制」を破り登山しようとした女性が山の神の怒りに触れ、杉の木に変えられたという象徴的な説話が備わり、それとの関連で「女人救済の諸堂」を建築するという習俗があったことがうかがわれるが、現時点においてその真意などは未詳である。

以上、断片的ながら近世の「布橋灌頂会」と「布橋」の状況を概観した。ここで注意しておきたいのは、1、「布橋灌頂会」に加賀藩の関わりが深いこと、2、「布橋」の状態は常に同一仕様で整備が行き届いたものではなかったこと、3、「布橋灌頂会」の内容は一律ではないこと、4、研究史的には近世初期の「素朴」から天保期の「豪華」（完成）へという発展的に整備されたとみる解釈しかなかったことである。おおむね近世後期において華やかかなりし法会として完成したとする見方に異論はないが、史料的にソフト面（教義・教学・

次第等)・ハード面(橋の状態・執行人口等)の両面から紆余曲折があったと考えられ、従来のような単線的な発展的解釈によるだけでは、「布橋灌頂会」の展開はもとより、それにもなう芦峯寺衆徒らの〈立山信仰〉における縁起管理(あるいは戦略的言説操作)の実態を解明できない問題点を指摘し、次章以降、いくつかの論点を整理したいと思う。

2. 「立山曼荼羅」のなかの女人救済思想

2-1. 「立山曼荼羅」の目的

「立山曼荼羅」は、主として立山芦峯寺の衆徒が〈立山信仰〉の世界を唱導・布教する際、「絵解き」に用いられた宗教絵画である。「絵解き」は立山曼荼羅が成立したとみられる18世紀中頃(近世中期)から、戦前(近現代)にいたるまで、一明治維新時に一時中断したが一継続して行われていた。

「立山曼荼羅」の「絵解き」は、今日、廃絶してしまっている。「絵解き」を見聞した古老や旧宿坊家の末裔の方々から、廃絶前に語られていた内容が採取できる。確かにかかる伝承は貴重であるが、〈前近代の「絵解き」〉を問題とする時、残念ながら前近代の宗教的内容まで明らかにすることはできないと考えている。すなわち、「絵解きの伝承」は、近代以降、神道的、または近代仏教的に再構成されたものであり、前近代におけるそれとは本質的に社会的・思想的背景が異なるとみるべきだからである。立山は、前近代に美女杉・姥石などに象徴される〈女人禁制の山〉であったが、立山でも近代化が進み、明治5年に〈女人禁制〉が解かれた。明治維新の一時期、〈立山信仰〉の世界を唱導・布教を行ってきた宿坊家の精神生活が神仏分離による改変を迫られたことにより、その活動を一時休止し、「立山曼荼羅」の「絵解き」はしばらく行われなかった。

近現代の「絵解き」は「立山曼荼羅」の構図や絵柄をそのまま踏襲しつつも、内容や目的は大きく変化した。強烈な「女人救済思想」などは語られることはなくなり、「絵解き」は、伝説や昔話を紹介にとどまり、主眼は立山登拝への誘引へとシフトし、女性の救済につながる〈説法〉や〈仏との結縁〉を意図するものは一旦失われたのである。

そこで、「立山曼荼羅」の「絵解き」の種本と目される『立山手引草』(嘉永7年、岩峯寺延命院玄清写)を手がかりとしたい。もとより岩峯寺側の言説であることには注意が必要であるが、この冒頭に前近代の「立山曼荼羅」の目的が端的に示されているのは貴重である。すなわち「立山曼荼羅」は、女人救済の絵画で、心に問い「心の善悪」がわかる絵画、そして絵を礼拝し供養すれば、即「禪定」となる絵画であるというのである。

つまり近世においては、従来指摘されるような登拝者に向けた山中案内図ではない。「立山曼荼羅」は〈説法〉や〈仏との結縁〉を意図した教具で、救済対象は〈女性〉で、「立山曼荼羅」を礼拝すれば「禪定」(擬似的登拝)となることから、女人禁制下における女人救済が第一義であったことがわかる。決して立山禪定登拝が可能な「健脚男性」が自己救済のために礼拝する絵画ではなかった。〈男性〉を対象とするのは、経済的・身体的な都合で、禪定登拝がかなわぬ身ゆえに、擬似的登拝を勧めることもあったが、むしろ、救済対象となる「近親の女性」を想定してのことであったと思われる。

このように、「立山曼荼羅」の「絵解き」は、前近代と近代・近現代では大きく変容していることを想定すべきで、前近代のそれは、「心の善悪」がわかる仕掛けを随所に絡めて絵解きされていたらしい。殊に地獄の相を見せて「心の善悪」を導き出す仕掛けについては、従来、再三指摘されてきたことであるが、「立山曼荼羅」の〈開山縁起〉や〈登山案内〉、〈布橋灌頂会〉などの場面もまた、「善悪」の発見(自覚の問題)に結び付け、未だ自律的に成仏を願う心をもたない人々(あるいは信仰を続けない人々)を「発心」へと導いたのである⁽³⁴⁾。

2-2. 串刺しの母—母を救う子—

「立山曼荼羅」に仕掛けられた、いくつかの〈女人救済思想〉を探ってみよう。前近代、女性は死後、〈地獄〉に墮ちるといわれていた。まずそれは〈女性その人自身〉の墮地獄の問題であったが、すでに死して〈地獄〉に墮ち冥界に彷徨う女性たちも取り上げられた。一般的に、貴女の墮地獄譚が語られたことはよく知られている。たとえば宮廷に遣えた女房たちや紫式部、皇極天皇や光明皇后などである⁽³⁵⁾。こうした著名な高貴な女性たちでさえ〈地獄〉に墮ちてしまうと語り、多くの同姓である女性たちに〈地獄〉の恐怖を強烈に実感せしめた。貴女らが〈地獄〉に墮ちた理由は、慳貪・嫉妬・傲慢・妄語だとされた。これらはとりわけ女性だけの罪ではなかったが、室町時代以降には「血盆経」の流布により、女性の〈産〉と結びつき、〈血の穢れ〉による血の池地獄やそれに対置する不産女地獄という女性だけの地獄が新たに設けられた。

「立山曼荼羅」では〈すでに死後地獄に墮ち冥界にさまよう女性〉として、目連尊者の母「青提」が、地獄で獄卒に串刺しにされた姿で登場し、施餓鬼供養の場面とセットで描かれている。いわゆる〈目連救母説話〉で、「立山曼荼羅」諸本のほとんどが、この図を中央付近に配置しており、開山縁起の〈玉殿窟の場面〉と同格に描き、この説話をいかに重視していたかがうかがわれる。

中国から流転してわが国に伝えられた目連尊者と母の説話には諸系統あるが、中国の俗文学系では母は地獄から直接救済されるのに対し、「立山曼荼羅」と関係があるのは『孟蘭盆経』系で、地獄に墮ちていた母を孟蘭盆齋によって狗身・女身を経て切利天に転生する流れである。それは『もくれんのそうし』（享禄4年）や施餓鬼供養のはじまりを述べた八文字屋本『目連記』、血の池地獄から大施餓鬼会によって救済したとする鱗形屋本『目連記』（貞享4年）などに実に変容著しく展開した⁽³⁶⁾。当時流布する〈目連救母説話〉の法華経の功德と大施餓鬼関係することを下敷きとして、前近代の立山では、阿鼻地獄や血の池地獄からの救済に加え、帝釈天信仰に基づく法華経奉納の作善と施餓鬼供養の功德を説いたのであろう。

このように目連と母という〈他者〉の話を受けて、近世「家」社会では、〈男性自身〉とその亡き母の問題と重なった。前近代の立山ではこれに関する救済方法をすべて用意していた。そしてまた、『立山曼荼羅』（佐伯家本）に描かれた目連伝の図の脇の札銘には、目連尊者の母は「又ハ開山上人母」と記され、立山における目連伝は、開山・佐伯有頼（慈興上人）だとして〈開山縁起〉と絡めて語られたとみられ、さらに共感をひきつけたことであろう。

2-3. 血の池地獄—如意輪観音と帝釈天—

立山山中の地獄景觀に、〈血の池地獄〉と呼ばれる赤褐色に染まる池があり、ここは前近代において「女性が墮ちる地獄」と信じられた。

「立山曼荼羅」にも、〈血の池地獄〉に沈む女性たちの姿が描かれている。『血盆経』に「如意輪観音」の救済が示されることから、『立山手引草』では「立山の「血の池」へ、心ある人は『血盆経』を供養し納むるなり」と説き、近世には立山禅定者〈男性〉は、一枚刷りの『血盆経』を岩峯寺で購入し、まさに山中の〈血の池地獄〉へ投げ入れて供養としたという。

『血盆経』は、室町時代以降、熊野比丘尼をはじめとする宗教者によって諸国でひろく流布した。その信仰は、近世に一層広まり、宗派を問わず諸国の寺院でこの経文の版行・唱導が行われた。立山芦峯寺衆徒も血盆経信仰を唱導し、「大施餓鬼血盆納経式」や「女人血盆池破戒供養」などをおこない、配札に出て、その功德を説き、諸国の女性たちに対して一枚刷りの『血盆経』を頒布したり、数年分の供養料を請けたりした。

『血盆経』には「如意輪観音」の救済が説かれるが、それに加えて『立山曼荼羅』（宝泉坊本）の系統や大仙坊C本には、「血の池」や墮地獄の女性の傍らに立つ帝釈天の姿が描かれており、法華経奉納の作善・功德で、立山地獄から帝釈天の切利天への転生・救済が、近世においても説かれていたらしいことをうかがわせる。

ちなみに明治・大正期にも、『血盆経』をはじめとする女人救済は積極的に行われていた。立山が神仏分離で神道的に様変わりしたことを強調しすぎた弊害からか、あまり近代における〈立山信仰〉が問題にされないことも指摘しておきたい。

2-4. 女体蛇身—両婦地獄—

「立山曼荼羅」には蛇体と化した女性を描く〈両婦地獄〉もある。

古代以来、男女の恋の文学作品で、円満なものはほとんどない。そのほとんどが忍ぶ恋や道ならぬ関係、裏切りの恋など悲劇的で不幸な恋が題材となった。そしてその恋の終に女性は「蛇」に変身してしまう姿で描かれ、女性の執念をシンボライズしてきた⁽³⁷⁾。前近代、それを女人罪障、邪淫、多情、妬毒の戒めなどを根拠として、〈念仏の救済〉へと導くものが多く出た。女性の蛇体変身自体は、『法華経』巻五「提婆達多品」第十二の「龍女成仏」からきているといわれている。

「立山曼荼羅」にみえる〈両婦地獄〉は、基本的に女性の嫉妬の地獄と解されており、かかる図像は、『熊野観心十界曼荼羅』が先行する。女性の蛇体変身も〈両婦地獄〉も決して立山のオリジナルではないが、立山地獄絵に定着しており、立山を離れて、遠隔地（現在の関東・関西・東海地方など）において絵解き・唱導をおこなう際、ポピュラーな話材であったことをうかがわせる。

両婦地獄の語りに用意された救済は、『法華経』の「変成男子」説による女人往生であろう。立山では「布橋灌頂会」と関連して「変女転男」の札が頒布されていたが、立山では〈血の池地獄〉との関わりでしか「変成男子」説は見当たらない。〈両婦地獄〉に救済は用意されていたのだろうか。

紀州道成寺鐘をめぐる安珍・清姫の悲恋蛇身譚を記す『道成寺縁起』（和歌山県立博物館蔵）諸本のうち、B本とC本では、蛇身の清姫が切利天への転生を遂げる結末となる。従来、女人往生のための「変成男子」説だけではなく、切利天上への転生譚も共存することはあまり指摘されてこなかった。立山の帝釈天信仰、すなわち法華経奉納の作善観察による切利天転生譚が底流にあり、近世の〈両婦地獄〉の語りにおける救済方向の一つとして用意されていたと考えられる⁽³⁸⁾。

2-5. 「布橋灌頂会」

いわゆる芦峯寺系統の「立山曼荼羅」では、「布橋灌頂会」が画面下部に大きく描かれる。

「布橋灌頂会」は、複数の宗教的要素が組み合わさっていたが、基本的には観念的に仮に死んで清まって甦る擬死再生儀礼である。健脚の男性が山中他界観に基づく立山禅定や峰入りを修めたのと同じ滅罪効果が得られるとされた。登拝がかなわない者が、この儀礼による救済対象となり、それは登山できない男性ほか、女人禁制下の〈全ての女性たち〉であった。

史料的に「布橋灌頂会」への女性たちの関わりは、秋彼岸中日に厳修された「布橋灌頂会」へ参加することというよりは、この法会に使用される金銭や白布の寄進であった。「立山曼荼羅」の「布橋灌頂会」を女性が見聞することは、法会への擬似的参加を意味した。もちろん目的は「女人救済」であるが、寄進を実行したのは「家」の家長（男性）で男性も無関係とはならなかった。

当時の恋する女性たちにとっては、「〈まこと〉の恋」が「煩惱」とされていたことは大きな問題であった⁽³⁹⁾。仏教の教えでは「煩惱」は、あくまでも断じられるべき対象として説かれていたからである。〈両婦地獄〉がチラつくなか、近世の民衆仏教では、「煩惱即菩提」を主張するものが現れ流布した。これは「煩惱」をやみくもに肯定するというのではなく、自らのこころに向き合い、より確かに煩惱を自覚してはじめて生死に対する問題意識が芽生え、自分のなかに眠る仏性を目覚めさせ、成仏を目指す道がひらかれるのだと説かれた。近世において民衆に対し仏教を勧めるにあたり、おのおのが悟りを求めようと決心する「発菩提心」を説くことが先決とされたのであろう。

富山県黒部市に、近松門左衛門『曾根崎心中』の最古版本（元禄16年（1703）成立。落丁なし）がある⁽⁴⁰⁾。

これは大阪府立中ノ島図書館蔵本（奥書部分1丁2頁欠損）と同本で初版完本となる稀観本である。平成20年（2008）、黒部市立図書館にて発見された。「曾根崎心中」が初演された元禄16年の秋ごろまでに刊行されたとみられる。

人形浄瑠璃『曾根崎心中』は初演以降大当たりし、それから「心中もの」ブームが起こったが、巷で、来世で男女二人の愛が結ばれることを誓った心中事件が多発したので、幕府は享保8年（1723）よりこれらの上演や脚本の執筆、そして発行を禁止した。「未来成仏うたがひなき 恋の手本となりにけり…」と結ぶが、「曾根崎心中」は心中礼讃の物語ではなかった。

あらすじを簡単に紹介しておこう。

時は元禄時代、舞台は大坂。主人公の平野屋手代〔徳兵衛〕は、主人で叔父の平野屋久右衛門の姪との縁談を断ったので勘当され、さらに親友の九平次に金を騙し取られ、大勢の前で詐欺師扱いされ、「男も立たず身も立たず」と心中に向かう。

一方、〔徳兵衛〕の〈恋〉の相方〔お初〕は、堂島新地天満屋の遊女として生きる女であった。

〔徳兵衛〕は密かに〔お初〕のもとを訪れる。

以前から恋仲であった二人。〔お初〕は〔徳兵衛〕に、「大坂を堰かれさんしても…此の世ばかりの約束か」と、都市・大坂を超えて来世での〈恋〉の成就を示唆する。そして二人は手を取り合い、曾根崎の露天神の森にて命を絶った…。

現世で悲恋に満ちた最期をとげた二人の死を、「未来成仏うたがひなき恋の手本となりにけり」と来世でのかたい契りとして結ぶ。

このように都市の人間関係における男同士の関係の〈まこと〉ならざる虚偽世界を下敷きにして、男女の〈恋〉こそ、ただ一つの〈まこと〉に等しいというのである。

「男女の恋」という煩惱にこそ〈まこと〉を見出し、その煩惱に向き合い悟りを求めようとする心が生じることこそを是とした。江戸時代の都市における現実の人間関係を背景に意味変換が行われ、当時の世相をよく反映している。「恋を菩提の橋となし…」(『曾根崎心中』)のフレーズもかかる文脈において看取することができる。ここでいう「橋」は実態ではなく観念でとらえられる。ここに「布橋灌頂会」に通底する観念が想起されるのである。すなわち「立山曼荼羅」の絵解きでもやはり「発菩提心」が重視されている(『立山手引草』⁽⁴¹⁾)。煩惱の数である百八の敷板で造られた立山芦峯寺の布橋は、まさに無明の橋(煩惱を自覚する橋)だったといえよう。

「布橋灌頂会」の女人救済思想が、「立山曼荼羅」に描かれた他の女人救済思想と大きく異なる点は、墮地獄を未然に防ぐこと(逆修)だけであり、墮地獄からの救済(死者供養)という要素がないことである。この「逆修」に近世の「家」の論理が持ち込まれ、「家」の女性のために、その近親者の男性も「布橋灌頂会」の勸進・唱導に応じたのであろう。一方、前に見た〈目連救母説話〉や〈血の池地獄〉、そして〈両婦地獄〉などは、女性自身の逆修に加え、後者の死者供養の要素がむしろ強いので、亡くなった「家」の女性の近親者(男性も含む)の問題ともなった。

要するに男性は「家」の論理のなかで、近親の女性の逆修に参加し、墮地獄から救済するという目的を持つことによって、男性自身が自己の信心を堅固にすることができたという回路があった。しかし、これによって地獄を含む「創造された女性の悪所」は、社会的にますます拡張することになっていった⁽⁴²⁾。

「立山曼荼羅」には、多くの女性が描かれ、女人救済思想が散りばめられている。しかしそれらは一様ではなく、個々に救済ラインが設定されながら、種々な作善の功德でそれらが結び付けられていたのである。

3. 「布橋灌頂会」の研究史的問題点

3-1. 「布橋灌頂会」の実態的観察—史料と「目隠し」—

以上、縷々述べてきたように、「布橋灌頂会」研究は、文献史料をはじめ伝承の取り扱いや方法論の見直しを検証すべきなど、課題が多く残っているといわねばならない。瑣末な論点を含めると、その内容はじつは膨大である。「布橋灌頂会」を取り上げた先行研究の特徴は、基本的に伝承によってイメージ化された世界に無批判的である。早計の誇りを免れないが、極端な言い方をするならば、近世に実態としての「布橋灌頂会」が行われていたことを示す史料は、あくまで芦峯寺衆徒側の運営記録や発給文書、そして芦峯寺衆徒からの伝聞記録などであり、「立山曼荼羅」にみられる「布橋灌頂会」の図柄も観念的絵画の域を出ない。よって、今日管見する現存史料によって復元研究を行おうとすると、そもそも「布橋灌頂会」が行われていたことを示す史料の根拠は乏しいのである。

立山芦峯寺衆徒は、近世後期から戦前まで、諸国で〈立山信仰〉に関する配札活動を行っていたことはよく知られている⁽⁴³⁾。近年では福江氏による立山芦峯寺側の檀那場史料によるデータ化によって、詳細が明らかになっている⁽⁴⁴⁾。これによると、檀那場における個人情報を実に細かく記録し、継続した関係を築こうとした戦略的布教の思惑が伝わってくる。ところが、このことをもって「布橋灌頂会」を想起すると、「布橋灌頂会」に参加したとされる女性の情報は、〈立山信仰〉布教において重要な情報にもかかわらず、「布橋灌頂会」への参加や参加による結縁に関する女性の個人情報、一切確認されていないのは、違和感を覚えざるを得ない。

現在、復元イベント化されている「布橋灌頂会」は、女性限定の募集であるが、「布橋灌頂会」の参加者は、伝承によっても女性だけとは決して限定していない⁽⁴⁵⁾。恐らく健康で登山できる男性以外は、この法会に参加したとみてよいだろう。当時、立山の管理権等の諸権利を奪われていた芦峯寺は、「女人往生の霊場」として、「布橋灌頂会」を女性の極楽往生をかなえる象徴的な法会として布教したことによると思われる。筆者は、本稿でかかるイベントの復元を「学問の社会還元の好例」と評したが、立山の精神文化史の理解と継承においては、この点なども難しい問題の一つである。

ところで、「布橋灌頂会」が一際、人目を引くのは行渡し講に列する女性たちが「目隠し」をしている姿であろう。

近世における「布橋灌頂会」の様子を記した文献やその様子を描いた「立山曼荼羅」に、「目隠し」する様子は記録されていない。「目隠しをした」というのは芦峯寺古老の伝承によったものである。

目隠しをする図像として想起されるのは重要文化財「絹本着色 聖徳太子絵伝(法隆寺献納)」(上野法橋・但馬房筆、嘉元3年(1305)成立、東京国立博物館蔵)である。目隠しした女性を含む人々が、四天王寺西門まえで浄土遊びを行っている」と解釈される場面が描かれている。残念ながらこのほかには目隠しを用いた図像や法会の例がないだけに、伝承者の創作とは考えにくく、「布橋灌頂会」の現場では「目隠し」が使用されていたのであろう。

「立山曼荼羅」に「目隠し」する様子は描かれないが、そもそも「立山曼荼羅」は、すでに述べたように写実的な実景ではなく、あくまでも観念の絵画と解すべきであり、そこに描かれた「布橋灌頂会」の様子もまた、実際の「布橋灌頂会」に参加できない遠隔地に住む人々のためのものであったと考えてよい。

この「立山曼荼羅」を用いて、立山芦峯寺の布橋が架かる川の対岸は「あの世(立山・他界)」だ、と説かれ、その境界に架橋される「布橋」において「布橋灌頂会」がおこなわれ、その橋を渡るとき次のように語った。すなわち「善人の通時、金銀瑠璃の弥陀来迎の橋と成、極悪重罪人ハ此橋笹蟹の糸のごとくに見へ、



「聖徳太子絵伝(法隆寺献納)」(部分)

因果の軽重ハ常破理の鏡のごとし」と…（「立山縁起」宝泉坊文書）。つまり絵解きの衆徒は、布橋は「この目のを開き、自らのこれまでおこないに向き合い、自らの煩悩を自覚する」ことのできるのが「布橋灌頂会」だと説教したのである。立山芦峯寺衆徒は「目ニは大暗闇を見て、初七日ニハ死出の山を越、二七日にはさんづの川を越…」（『御嬭尊縁起』（宝伝坊元良本））と死後世界を説いたが、「布橋灌頂会」の行渡し講が浄土入りを意味するのであれば、闇の世界は死後の世界へのをあらわしたのであろう。

従来の解釈に則せば、実際におこなわれた「布橋灌頂会」の現場では、布橋を「無明（煩悩）の橋」とするべく視界を遮り、創出された「この世」と「あの世」の空間認識のもとに厳修されたので、空間を切り替える「装置」として「目隠し」が使用されたものと考えられる。

3-2. 「布橋灌頂会」の女人衆

佐伯幸長『立山信仰の源流と変遷』によると、

参列数千の女性は此の行列の中に入るもの、後につづくもの、皆一斉に白布を以って目隠しし、明念坂や布橋と、称名念仏の声高らかに一大絵巻を展開し嬭堂本堂に入室したのである。（中略）そして大法要の最後に、（中略）正面の唐戸が一度に開かれ、雲表はるかに立山両大権現の霊峰を仰望し、伏して往生の大事を遂げ、血の池地獄の惨苦に落ちざる仏誓を得て歓喜、手の舞い足の踏んどを知らず、各々、血盆経、月水の秘符を受けて涙を流して故郷に帰ったのである。

全国の女性といっても特に参集したのは、北陸七カ国に美濃、飛騨、尾張、三河、遠江、信濃の女性が多く、いかなる悪凶作の年でも三千人は下らなかったといわれる。

近世に執り行われていた「布橋灌頂会」には、「いかなる悪凶作の年でも三千人は下らなかった」というほど、まさに女性の群参状況がうかがわれる。これは、冒頭に引用した佐伯立光氏の記述にも同様の記述がある。

かかる情景描写は、研究史的に草野寛正氏の「立山嬭堂の行事考」⁽⁴⁶⁾に始まる。これは草野氏による布橋灌頂会の聞き取り調査（昭和4年、芦峯寺佐伯十百作氏より）の記録である。まさにこれに「布橋灌頂会」の嬭堂では、扉が閉ざされ真つ暗闇で1時間弱の読経の後、「四方の扉は一斉に開放せられ、闇黒の世界は一転して、そこに彼らの待ち焦がれたる光明世界即ち浄土が出現するのである」と記述がみえ、佐伯幸長氏や佐伯立光氏へ影響を与えたとみられる。しかしこれについては福江氏が史料的に部分修正しているように、江戸時代の古文書や絵図などと整合せず、事実関係は判然としない⁽⁴⁷⁾。

近世における〈立山信仰〉は庶民層のみならず、江戸城の関係者など身分制社会の最上級の人々にも受け入れられていた。殊に江戸幕府第11代将軍徳川家斉の夫人の広大院に従事した御年寄の大奥女中らをはじめ、江戸幕府第12代将軍徳川家慶に従事した上臈御年寄（大奥女中最高位）の山野井、さらに幕末期には、江戸幕府第13代将軍徳川家定の夫人の天璋院（篤姫）や側室の豊儉院（お志賀）、江戸幕府第14代将軍徳川家茂の夫人の皇女和宮、従事の大奥女中、このほか幕政を担う老中や諸大名などのかかわりも明らかになっている⁽⁴⁸⁾。文久4年（1864）には「布橋灌頂会」の執行に際し、天璋院（篤姫）や皇女和宮らは「御息災御延命」のため、白布料として、天璋院は金2,000疋を、和宮は金1,000疋を寄進している。

このように檀那場における女性の関わりについては、残存史料が乏しいとはいえ、詳細にその実態をすることができるところが、慶長19年、加賀藩の芳春院と玉泉院の両夫人が芦峯寺へ参詣した際に、「布橋灌頂会」に参加したと解されるものの、その後、「布橋灌頂会」は形や規模を変えながら年中行事として幕末まで行われていたが、これに参加した女性の名前や住所などを記した名簿をはじめ、記録などは見つかっていない。木造の「布橋」は数十年に一度の架け替えが必要であり、その都度、芦峯寺衆徒の嘆願があつて架け替えが行われていたが、前に挙げた元治元年（1864）、文久4年（1864）の勸進記のなかでも、「御当代に至りて、加賀中納言殿先代芳春院・玉泉院、慶長十九年の秋八月、灌頂受けたまう」と、参加者についてはこの事例だけを取り上げている。

全国から女性が群参するには、今日においても「開催要項」のようなものがなければ混乱は免れない。白装束、菅笠、目隠しなどは、持参したものか貸し出されるものなのか、史料的に判然としない。

また「布橋灌頂会」の参加費については、参加者の一番渡りは75両、二番渡りは50両、三番渡りは35両を納めたという⁽⁴⁹⁾。これを信ずれば、少なくとも前列への参加には相当な大金が必要だったとみられ、最低でも銀10匁は必要だったという。しかしこれも史料的には裏づけが取れていない⁽⁵⁰⁾。このような奉納金を用意できる女性の環境は、武家の棟梁家の女性か、豪農・豪商の女性に限られると思われるが、立山芦峯寺にはこれらの史料が現存していない点、注意が必要である。佐伯幸長氏ほか伝承者らが、「布橋灌頂会」に多数の女性が参加していたとする実態を示す、歴史的な史料証明は管見の限り限界がある。

史料の問題でいえば、やはり違和感を覚える。参加者だけでなく、観覧者による同時代の観察すら現存していないからである⁽⁵¹⁾。そしてそもそも群参するのは「自他国」の者であって、地元の芦峯寺の女性たちの姿がまったくみえないのである。すなわち、立山の「布橋灌頂会」には、地域の儀式法会、地域の女性救済という視点が、史料的にも研究史的にも皆無なのである。

〈立山信仰〉は、大雑把に言えば、そのはじまりは、水分神信仰や地獄谷景観を中心とした山中他界観から出発し、修験的な山中修行の世界観へ移行し、組織化し、やがて行場は名所化して、山麓における近世の宿坊経営による縁起伝承や靈験譚を用いた勸進・勸化へと展開した。「布橋灌頂会」を浄土入りの白山行事と結びつける解釈⁽⁵²⁾や、「あの世とこの世の境は、生から死へ、死から生へという、両方の世界を司っており、造化の媪尊が人の生誕・生長という生命力の守護神として捉えられていた」⁽⁵³⁾などの指摘は、近世以前の素朴で在地の宗教民俗として発生・継承されてきたと読まれてしかるべきであるが、先行研究では、あくまでも政治的で他所・遠隔地の女人救済という目的が先行してきたのである。

以上のことから仮説を述べると次のとおりである。

「布橋灌頂会」は、近世以前においては、媪谷川に素朴な橋を架けて、男女別け隔てなく、芦峯寺地域住民の参加するものであった。これが近世に到り、立山が加賀藩の支配を受けるようになり、やがて儀礼化して、天台教学に縛られずに様々な仏教教義の影響を受けながら、紆余曲折を経て成熟していったのであろう。もちろん、諸国から女性が立山媪堂へ来た事実はあったと思われるが、現存する通行手形には「布橋灌頂会」を厳修したという秋の彼岸前後の史料は確認できない。本論で確認してきた現存する史料状況から、筆者は近世「布橋灌頂会」に諸国からおおよそ3000人もの女性たちが群参したという実態は「なかった可能性が高い」とみている。想像の域を出ないが、現在の史料の残存状況や伝承の中身からすると、やはり「布橋灌頂会」の主体は、芦峯寺地域の女性たちではなかっただろうか。それがやがて諸国へ勸進・勸化による檀那場配札が定着し、遠隔地での布教が広く展開してくるようになると、芦峯寺地域の女性たちが、いわば「ヒトガタ」として依り代となり、笠や目隠しをつけてこれに代参としたことで、「伝承」として継承されたと思われる。こうした視点を踏まえて、今後も引き続き史料を精査しなければならない。

3-3. 「布橋灌頂会絵巻」について

今日の「布橋灌頂会イベント」のモデルとなったのは『立山曼荼羅』（日光坊A本）である。同本は「立山曼荼羅」の諸本の中でも詳細であることは先に述べたとおりである。

しかし、「諸堂勤方等年中行事」には、「布橋灌頂会」の厳修に際して、加賀藩前田家の「梅鉢紋」入りの提灯を配置したことなどが記されるが、現存の「布橋灌頂会」の絵図には描かれることがなかった。

近時、『富山史壇』181号⁽⁵⁴⁾に「史料紹介」として福江充「芦峯寺旧宝泉坊の『布橋灌頂会絵巻』と「布橋灌頂会配役・配置図」に関する一考察」と題する論考が掲載された。特にこの論考で芦峯寺旧宝泉坊の『布橋灌頂会絵巻』が初めて公にされることになり、平成29年1月には立山博物館において初公開となった。卷子装という点でも、従来とは装丁の異なったものとして大変注目される。

福江氏の紹介によると、成立時期は幕末期の成立という。教蔵坊が信濃国の檀那場から文政8年（1825）

に寄進された地蔵菩薩半跏像が描かれ、安政5年（1858）成立の『立山曼荼羅』（宝泉坊本）の影響を受けていることを主たる根拠とする。本図の特徴についての指摘があるが、説話画がないこと、景観が比較的「真実に近いかたち」で描かれているという。「真実に近い」なる表現にはいささか違和感を覚えるが、本図には芦峯寺集落を整備のいきとどいた聖域として表現しようとする意識がうかがわれ、また「布橋灌頂会の女性参列者が立山曼荼羅のそれよりも丁寧に描かれている」と評している。福江氏による本史料紹介における主旨は、『立山曼荼羅』（宝泉坊本）との比較による成立年比定であるようだが、両者は似ているものの、松平乗全の手ではなく、これを模倣したものと推断するが、感覚的であり論拠は不十分であるといわざるをえない。

ここで問題にしたいのは、この史料の特徴は「布橋灌頂会の女性参列者が立山曼荼羅のそれよりも丁寧に描かれている」と評する点であり、これと同時に梅鉢紋入の提灯や幔幕が描かれていることも見落としてはならない。「布橋灌頂会の女性参列者」として、明らかに身分が高い女性の姿を描いており、まさに本稿で繰り返し触れてきた加賀藩の芳春院と玉泉院の両夫人とみてよいであろう。梅鉢紋入の提灯などで法会を荘厳したことも、その配置場所こそ異なるものの、想像に難くない景観であり、「立山曼荼羅」の諸本には事例がない大きな特徴といえよう。

このこともまた前節で触れたように布橋の架け替えの問題とかかわっていると考えられる。架け替えの都度、芦峯寺衆徒の嘆願があったが、勸進記に見える「御当代に至りて、加賀中納言殿先代芳春院・玉泉院、慶長十九年の秋八月、灌頂受けたまう」を絵画化し、主に加賀藩の関係者に対して用いられたものが、芦峯寺旧宝泉坊の『布橋灌頂会絵巻』なのであろう。軸頭がプラスチック製で戦後の後補とみられるが、近代以降、加賀藩をはじめ「布橋灌頂会」が行われなくなった後も本図が使用されたことを物語っており、失われた在地の信仰空間を知る絵画として、近世とは異なった利用価値が生じて活用されたことによるとおきたい。本図は、写実的にみえるが、あくまで観念的な想像図であり、細部は重要ではなかったが、列に白の経帷子を纏った男性が連なるなど、他の絵画と異なる点が複数あり、これらの検証は、紙幅の都合により、他日に期することにした。

4. まとめにかえて

「布橋」は、明治時代にいたりその機能とともに姿を失った。その後、昭和40年代に整備された「立山風土記の丘」構想とその建設に先立ち、「布橋」は復元架橋された。その際の記録文書を綴った昭和44年度「風土記の丘綴」（本館蔵）に、「布橋」の施工風景写真が貼り付けられている。施工は佐藤工業株式会社、施工期間は昭和45年2月23日～6月30日、今日見られるように美しくよみがえることになった。残念ながら、復元の際、どの史料に基づいて設計されたか、施工業社にも当時の記録がなく、判然としないが、長さは45.45メートル、有効橋幅員は3.6メートル、敷板の数は108枚とされるなど、概ねかつての仕様が踏襲されている。度重なる洪水の影響で、近世の兩岸橋詰の地形が変化したので、橋西詰（芦峯寺集落側）の基点位置は新しく設定されたとみられる。ちなみに架橋の際には発掘も行っているが遺物は特に確認されなかった。

平成26年9月21日（日）、立山芦峯寺において「布橋灌頂会イベント」が開催された。この開催を記念して、立山博物館展示館企画展示室において、「布橋灌頂会がわかる！！—あの世とこの世を渡す白道—」と題する記念展を開催した（13日～23日）。この記念展において、先行研究に導かれながら2、3の自説を含めて展示をおこなった。このことについて、未だ成文化していなかったもので、本稿はこれを中心にまとめたものである。

史料の性格と残存状況には、改めて注意しなければならない。観光事業として「布橋灌頂会イベント」が開催され、現代へ立山の歴史的文化的意味が還元される機会となるが、本稿は研究史的問題点を指摘しつ

つ、「伝承」に無批判的な研究分野に対して、問題提起をおこなったつもりである。随所に乱暴で飛躍した論述を含んでいるが、御叱正を仰ぎたい。

【付記】

本稿第2章は、平成27年度前期特別企画展『女性たちの立山—近世から近代へ』展示解説書（城岡朋洋担当、平成27年7月18日発行）所収の拙稿「立山曼荼羅のなかの女人救済思想」をもとに加筆・修正したものである。

【註】

- (1) 諸国の様相については、時枝務・林淳・長谷川賢二編『修験道史入門』（岩田書院、2015年10月）、長谷川賢二『修験道組織の形成と地域社会』（岩田書院、2016年3月）等で詳しく整理されている。なお、〈立山信仰〉に関する研究史は膨大である。本稿では詳細な研究史的整理を置かず、問題関心に即した主要な言説を適宜とりあげていく。〈立山信仰〉研究の全体については福江充「立山信仰史研究文献目録」（『山岳修験—立山特集』第20号、1997年11月）、または『綜覧立山曼荼羅』（富山県[立山博物館]開館20周年記念特別企画展展示解説書、平成23年）を参照。
- (2) 近年では管見のかぎり山本義孝『立山における山岳信仰遺跡の研究』（平成21・22年度富山県[立山博物館]調査研究報告書、平成23年3月）のみである。
- (3) ここではたとえば、明治以降、立山は神仏分離による廃仏毀釈によって神道化され、仏教的世界観で成り立っていた近世的景観が完全に抹消されたとする歴史観や、芦峯寺・岩峯寺中心史観による仮説などを指している。
- (4) 生まれ清まりの再生という宗教儀礼であると位置づけ、これを「擬死再生儀礼」と呼ぶのは五来重氏の学問上の造語である。日和祐樹「立山信仰と勧進」（『大阪市立博物館研究紀要』2号所収、1970年）でも踏襲されている。いずれも「特に女人を対象として」という「伝承」をもとに考察・解釈が展開している点、またこれが旧宿坊家や立山風土記の丘以降の展示・解説にも（立山博物館においても）無批判的に取り込まれてきた点、注意が必要である。
- (5) 主要なもの、草野寛正「立山蠟堂の行事考」（『高志人』創刊号所収、高志人社、昭和11年）、佐伯幸長『立山信仰の源流と変遷』（立山神道本院、1973年）、佐伯立光『立山芦峯寺史考』（立山寺発行、1957年）・同『立山史談』（昭和40年）、五来重「布橋大灌頂と白山行事」（山岳宗教史研究叢書10、高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』所収、名著出版、昭和52年）153頁～176頁、日和祐樹「立山信仰と勧進」（『大阪市立博物館研究紀要』2号所収、1970年）、高瀬重雄「布橋大灌頂」（『立山信仰の歴史と文化』所収、名著出版、1977年）、菊地武『我が国擬死再生儀礼と立山布橋大灌頂会（前篇）』（富山県[立山博物館]調査研究委託報告書、1994年）・同『我が国擬死再生儀礼と立山布橋大灌頂会（後篇）』（富山県[立山博物館]調査研究委託報告書、1995年）、福江充『立山信仰と布橋大灌頂法会—加賀藩芦峯寺衆徒の宗教儀礼と立山曼荼羅—』（桂書房、2006年、以下本稿では「福江A論文」と略称）ほか。このほかにも橋禮吉氏や岩鼻通明氏、高遠奈緒美氏、また近年では前田智子氏「現代の布橋灌頂会—富山県中新川郡立山町芦峯寺の事例から」（『名古屋大学人文科学研究』v. 41所収、2012年）などがある。
- (6) 『第11回国民文化祭とやま'96 立山フェスティバル 報告書』（立山町実行委員会編、1997年）に詳しい。
- (7) すでに福江氏による整理も備わるが、今後の研究に資するために「布橋灌頂会」にふれた資料を一覧する。1. 享保7年（1722）「定（立山大権現祭礼御餉米記・立山御蠟堂祭礼御餉燈明記）」、2. 延享4年（1747）「布橋灌頂会次第につき書付」、3. 安永8年（1779）「芦峯蠟堂大縁起」（芦峯寺日光坊）、4. 寛政7年（1795）「立山御蠟尊布橋施主帳」（芦峯寺大仙坊）、5. 寛政10年（1798）佐藤季昌『立山紀行』、6. 文化2年（1805）「立山御蠟尊莊嚴施主帳」（芦峯寺善道坊）、7. 文化14年（1817）「芦峯中宮寺蠟堂大縁起」（芦峯寺権教坊）、8. 文政3年（1820）「御蠟尊縁起」（芦峯寺宝伝坊）、9. 文政3年（1820）「立山御蠟尊別当奉加帳」（芦峯寺泉蔵坊）、10. 文政6年（1823）「立山御蠟尊別当奉加帳」（芦峯寺大仙坊）、11. 文政10年（1827）「北国立山御蠟堂別当奉加帳」（芦峯寺相善坊）、12. 文政年間「立山本地阿弥陀如来略記」、13. 文政12年（1829）「芦峯中宮御蠟尊縁起」（芦峯寺泉蔵坊・龍淵改訂）、14. 文政12年から天保頃「当山古法通諸事勤方旧記」、15. 天保2年（1831）「立山御蠟尊布橋大灌頂勧進記」（芦峯寺善道坊）、16. 天保3年（1832）「若僧中旧記之定」、17. 天保11年（1840）「義賢行者当峯山籠中復覆」、18. 天保13年（1842）「諸堂勤方等年中行事」、19. 安政5年（1858）・6年（1859）「布橋灌頂法会職衆請定」などがある。
- (8) 「当山古法通諸事勤方旧記」（文政12年（1829）5月成立、芦峯寺一山会文書、富山県指定文化財）

- (9) 「諸堂勤方等年中行事」（芦峯寺一山会文書、富山県指定文化財）
- (10) 福江氏のご教示による。
- (11) 前掲、福江A論文。
- (12) たとえば福江充『立山信仰と立山曼荼羅—芦峯寺衆徒の勸進活動—』（岩田書院、1998年、以下本稿では「福江B論文」と略称）、同『近世立山信仰の展開—加賀藩芦峯寺衆徒の檀那場形成と配札—』（岩田書院、2002年、以下本稿では「福江C論文」と略称）など。
- (13) 「義賢行者当峯山籠中復讐」（大仙坊文書）
- (14) たとえば、菊池武『我が国の擬死再生儀礼と立山布橋大灌頂会（後篇）』（富山県立山博物館調査研究報告書、1995年3月）に、「この灌頂会のリアルな様子は、種々の『立山曼荼羅』や『立山縁起』等により知ることが出来る」をはじめ、基本的にはかかる論調である。
- (15) 前掲、福江B・C論文
- (16) 他に泉蔵坊の勅化になる文政3年「立山御嬭尊別当奉加帳」（半田市立博物館蔵）のほか県外にも現存する。
- (17) これらは『研究紀要』第19号（2012年）にすでに翻刻が備わるので、本稿では読み下し現代語にて示す。
- (18) 芦峯寺一山の年中行事は、その年の代表坊家（別当職・一老）が取り仕切り、資金管理もした。文化11年の別当職を務めた芦峯寺宝泉坊の場合、秋彼岸7日で7両。布橋灌頂会が行われた秋彼岸中日には、白布366反を調達し、開催経費は金46両3分であった。この年の総経費は121両なので、およそ半分が布橋灌頂会に使用された。
- (19) この分類中で最も成立の早い文明18年（1486）『廻国雑記』（道興）には記述がない。元禄9年（1696）『一宮巡詣記』（橋三喜）、寛政9年（1797）『立山禪定』（石崎古近）、文化12年（1815）『日本九峯修行日記』（野田泉光院）などにも見えていない。
- (20) 「御嬭尊縁起」宝伝坊元良本、芦峯寺一山会文書、文政3年（1820）成立
- (21) 『法華経』の文字数は定まったものがない。69,384字は、日蓮『開目抄』に「此経一部八卷二十八品六万九千三百八十四字」と定義されており、これが典拠となった可能性がある。
- (22) たとえば芦峯寺雄山神社文書「断簡（天之浮橋につき）」（年代未詳）に布橋の長さ18間のほか、橋の仕様とその意味を示す。同じく芦峯寺雄山神社文書「天の浮橋図」にも、「はしのわたり十八間」とみえる。橋の両サイドに小間返しを2間ずつあり、両岸から石垣が6間分張り出すように生まれ、それに沿うように谷底からV字型で長さ6間3本ずつ立ち上がっていた。
- (23) 布橋灌頂会をはじめ、芦峯寺における宗教的経営と龍淵とのかかわりについては、福江充氏が前掲福江B論文のなかで詳細な検討を加えている。
- (24) 前掲、福江A論文
- (25) 拙稿「立山における閻魔信仰—第I部「閻魔の眼光」の展示理念にかえて—」（開館25周年記念特別企画展『立山×地獄展』展示解説書所収、富山県[立山博物館]、平成28年）82頁～86頁
- (26) 現存する木造嬭尊坐像の一軀には、永和元年（1375）成立を示す墨書銘がある。
- (27) 豊島修「丹後地域の「迎講」伝承と、その「祖型」の宗教儀礼—白山・立山の「白山行事」と奥三河の花祭」行事について—」（『京大女大文』158、京都女子大学国文学会、2016年1月）においてもこの視点を踏襲する。
- (28) たとえば「おめんかぶり」浄真寺（東京都）、「二十五菩薩練供養」当麻寺（奈良県）、泉涌寺即成院（京都府）、太山寺（兵庫県）、「秋の峰入り」羽黒修験（山形県）、「イザイホー」久高島（沖縄県）などがある。
- (29) 前掲、福江A論文
- (30) 「橋札」（大仙坊旧蔵、雄山神社中宮祈願殿保管）
- (31) 年未詳であるが、関連史料から寛政10年（1798・戊午）7月29日の史料と考えられる。
- (32) 「橋一件覚書」（芦峯寺一山会文書、富山県指定文化財）
- (33) 「御嬭堂宝前布橋御掛替願書」（芦峯寺一山会文書、富山県指定文化財）。加賀藩に対し布橋架け替えの嘆願の心得とすべき記録として作成された書物である。
- (34) 拙稿「こころをうつす 絵鏡」（前掲、『綜覧 立山曼荼羅』所収、平成23年）122頁～127頁
- (35) 勝浦令子「女の死後とその救済—母の生所と貴女の墮地獄—」（西口順子編『仏と女』所収、吉川弘文館、平成9年）
- (36) 渡 浩一「串刺しの母—地獄図と目連救母説話—」（林雅彦編『生と死の図像学—アジアにおける生と死のコスモロジー—』所収、至文堂、平成15年）
- (37) 堤邦彦『女人蛇体—偏愛の江戸怪談史—』（角川選書33、角川書店、平成18年）

- (38) 『立山と帝釈天』（富山県[立山博物館]平成25年度特別企画展展示解説書、平成25年）
- (39) 大桑齊「都市文化の中の聖と性」（岩波講座〈近代日本の文化史2〉『コスモロジーの「近世」』所収、岩波書店、平成13年）
- (40) 川端家文書のうち。黒部市教育委員会蔵
- (41) 林雅彦氏が発見・翻刻された「立山曼荼羅」の絵解きの種本とみられる『立山手引草』（岩嶽寺延命院蔵、嘉永7年）の冒頭に、「慙愧懺悔 六根清浄 一時礼拝 供養恭敬 転圓開尊 一切衆生 見聞随喜 身心莊嚴 除生死苦 發菩提心」とみえている。
- (42) 五来重「布橋大灌頂と白山行事」（『白山・立山と北陸修験道』所収、名著出版、昭和52年）
- (43) 前掲、佐伯幸長氏、佐伯立光氏ら以降、近世の「立山信仰」を問題にする際は必須の史料である。
- (44) 前掲、福江B・C論文、同『江戸城大奥と立山信仰』（法蔵館、2011年、以下本稿では「福江D論文」と略称）ほか
- (45) 前掲、福江A論文
- (46) 草野寛正「立山嬭堂の行事考」（『高志人』創刊号所収、昭和11年）
- (47) 前掲、福江A論文。芦嶽寺雄山神社文書「願達等綴」には近世後期の布橋の姿や鬱蒼とした嬭堂界限の様子が描かれる。このことも根拠となる。
- (48) 前掲、福江D論文
- (49) 前掲、佐伯幸長論文
- (50) 金1両＝銀60匁として、1両の価値を10万円とすると銀1匁は1,667円程度。12万円とすると2,000円。よって10匁は17,000円～20,000円と推定される。
- (51) 『立山遊記』や『加越能金砂子』などにみえているが、あくまでも伝聞の域を出ない。
- (52) 前掲、五来論文、菊池論文、豊島論文。
- (53) 前掲、菊池論文。
- (54) 福江充「芦嶽寺旧宝泉坊の『布橋灌頂会絵巻』と「布橋灌頂会配役・配置図」に関する一考察」（『富山史壇』181号所収、越中史壇会、2016年11月）66頁～74頁